

古代アメリカ学会 第2回西日本部会研究懇談会のお知らせ

第2回西日本部会研究懇談会「古代社会へのまなざし Vol.2」を以下の要領で開催することになりました。どうかふるってご参加下さい。また、非会員の方も参加できますので、関心のある方にはお声をおかけ下さい。参加の事前登録は必要ありません。

【研究懇談会概要】

考古学者は、掘り出された人工物や自然物そのものを間近にみつめて、分析します。また、それらが遺された「場」ないしコンテキスト全体を広く眺めて、分析します。遠近様々なポイントに焦点を移すまなざしは、古代社会の総合的理解に不可欠なものです。今回は、米国で考古学を学んだ者を含む2名の若手研究者が、作成中の博士論文をベースとして、それぞれ異なる視点から古代アンデス社会に迫ります。専門性の高い分野に関してはコメンテーターを招聘しており、様々なレベルでのディスカッションが見込まれます。2つの異なるまなざしは、研究地域に限定されない考古学のあり方を浮かび上がらせるでしょう。

発表1「先スペイン期ペルー北部高地におけるラクダ科飼養の開始と変遷—動物考古学的アプローチから—」

【発表者】： 清家大樹（筑波大学大学院博士課程／聖マリアンナ医科大学解剖学講座技能員）

【コメンテーター】： 鶴澤和宏（東亜大学人間科学部教授）

【発表概要】

南米ラクダ科動物は、アンデス山脈に分布する高度適応をした大型偶蹄類である。アンデス地域においては最優先種であり、特に紀元前4000年頃にアンデス地域で家畜化されてからは、運搬、労働力、毛や肉の供給源、そして祭祀などに用いられ、その後のアンデス地域の諸社会にとって極めて重要な貢献をした。ただし、その利用法などの意味合いは社会ごとに変化していったことが予想され、またそうした変化は遺跡出土動物骨資料の特徴の変化にも痕跡を残していると考えられる。本論では、ペルー北部高地の形成期、ワリ期、インカ期の7遺跡から出土したラクダ科動物骨を資料として扱い、遺跡出土動物骨資料に現れる諸特徴の分析、比較を通じて、ヒトと動物とのかかわりの変化により動物がどのように改変されるのかについて明らかにしていく。

発表2「死者とともに生きる：シカン遺跡における宗教儀礼の本質とその変容過程について」

【発表者】： 松本剛（南イリノイ大学人類学科博士課程）

【コメンテーター】： 芝田幸一郎（神戸市外国語大学准教授）

【発表概要】

近年の研究成果により、ペルー北海岸北部に興り、十世紀半ばに最盛期を迎えたシカンは神政多民族国家であったと考えられている。その首都であるシカン遺跡の中心地は、四つの大規模祭祀建築とそれらに囲まれた大広場と呼ばれる公共スペースから成る。2006年に祭祀建築のひとつであるワカ・ロロ神殿、2008年に大広場で実施された発掘では、死者の埋葬や埋葬後も続いた生者との交流、金属工房、饗宴、儀礼用水路を使った献酒など、さまざまな活動の痕跡が見つかった。本発表では、これらの発掘結果をもとに、シカンにおける宗教儀礼の本質とその変容、そして社会発展においてそれらが果たした役割について考察する

【日時】: 2013年6月29日(土) 13:30~16:45

- ・発表1 13:30~14:30
- ・コメントおよび質疑応答 30分
- ・小休憩 (15分)
- ・発表2 15:15~16:15
- ・コメントおよび質疑応答 30分 (16:45終了予定)

【会場】: 京都文化博物館 別館(旧日本銀行京都支店) 2階講義室

※別館の入口は、三条通沿いです。本館の入口(高倉通)と異なりますので、ご注意ください。

http://www.bunpaku.or.jp/info_access.html

皆様のご参加をお待ちしております。

【連絡先】

- ・西日本部会幹事・芝田幸一郎(神戸市外国語大学) ks*inst.kobe-cufs.ac.jp (*を@に換えて下さい)
- ・古代アメリカ学会事務局 jssaa@sa.rwx.jp